



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4483号 2018.7.12 発行

認知症高齢者の財産を守れ 信金OBが立ち上がった 大鹿靖明



朝日新聞 2018年7月10日
 高齢者(右)の自宅を訪問する「しんきん成年後見サポート」のスタッフ(同サポート提供)

判断力が弱った高齢者は詐欺商法に狙われやすい。被害を少しでも食い止めようと、信用金庫のOBたちを集めた団体が成年後見人になり、認知症のお年寄りの財産管理に乗り出す動きが全国に広がっている。

梅雨寒のある日、城南信用金庫を退職した清水幸雄さん(70)は、介護福祉士や社会福祉士の資格をもつ上田早苗さんと東京・品川の賃貸住宅を訪れた。2人は品川に支店がある5信金を作る「しんきん成年後見サポート」のスタッフだ。6畳一間に住む70代の男性は認知症の傾向がある。

テレビを凝視する男性に、上田さんが「ワールドカップを見るの?」と話しかける。「私は野球だから……」「どのチームが好き?」「……西鉄。稲尾」

男性は数十年前に上京し、故郷とは音信不通。病が襲い、生活がままならなくなった。親族に代わって品川区長が家裁に法定後見を申し立て、同サポートが受任した。以来2年半、2人は毎月、男性宅を訪れ、管理する口座から日々使うお金を渡し、薬局に薬代を支払う。病院の送迎もし、世話を焼く。すると、ほとんど会話がなかった男性が言葉を取り戻したという。

同サポートのメンバーは今、信金OBを中心に総勢26人。累計23人の法定後見を受任してきた。清水さんは認知症の親族の介護を機に福祉に関心を持ち、退職後にスタッフになった。男女ペアで訪問するのが鉄則。認知症の高齢者相手だと「言った、言わない」のトラブルに陥りかねないし、女性の方が話の接ぎ穂をつかむのがうまいからだ。「男同士だと、会話がぎこちなくて」と清水さん。

同サポートは2015年、城南信金やさわやか信金など5信金を母体にできた。「今後、認知症の高齢者が爆発的に増えます。後見人のなり手の育成とともに、財産管理ができる金融機関と組めたらと考えました」と品川区社会福祉協議会の小佐波幹雄係長。

団塊の世代が80代にさしかかる25年には、認知症の人が700万人になると推計され、成年後見のニーズも高まる。小佐波さんは信金がその受け皿に、と期待した。「金融機関は内部で牽制(けんせい)しながらお金を管理するからです」

成年後見人の不正は14年には831件、被害額は56億円余にのぼった(現在は減少)。こっそりお金を流用するのは親族だけでなく、弁護士も。「通帳と印鑑を同一人物に預けたら誰でも魔が差す」と同サポートの吉原毅理事長(城南信金顧問)は言う。

信金OBだから考えた 「魔が差さない」成年後見とは 大鹿靖明

朝日新聞 2018年7月10日



「しんきん成年後見サポート」理事長を務める吉原毅・城南信用金庫顧問

信用金庫のOBたちが成年後見に乗り出した。「しんきん成年後見サポート」理事長を務める吉原毅・城南信用金庫顧問に、なぜ信金OBたちが成年後見に関わるようになったのか、話を聞いた。

——城南信金やさわか信金など東京都品川区内に営業基盤をもつ五つの信金が「しんきん成年後見サポート」を設け、高齢者たちの成年後見に乗り出したとうかがいました。そこに至ったいきさつは？

「お年寄り、つい悪い人にだまされてしまうんですね。オレオレ詐欺やシロアリ詐欺にあったり、『アパートを建てて大家さんになりましょう』と言われて、お金を取られてアパートを建てられたり。押し売り商法や詐欺的商法に食べ物にされてしまう。店頭においでになり、『今日は外車を買うから』と300万円の現金を引き出しに来た方がいらっしゃいます。それで、お金を受け取りに来た詐欺師に300万円をポンと渡しちゃう。あるいは家族と称する人がお金を下ろしに来る。『本当に家族だろうか』と疑って確認すると詐欺だったりする。そういうのが多発していて、高齢者の方々の財産をなんとかお守りしないといけないと思っていました」

「それで被害の拡大を予防する手立ての一つとして成年後見制度に思い当たったのです。高齢化が進み、いまや成年後見制度の利用者数は21万人になります（成年後見、保佐、補助、任意後見の合計）。その多くが、認知症などになり、預貯金や不動産といった財産管理が自分ではできにくくなった人たちです」



アルファサード「やさしい日本語」で自治体の Twitter 等を活用した情報発信を支援するサービスの提供を開始 Sankeibiz 2018年7月11日



アルファサード株式会社(所在地：大阪府大阪市、代表取締役：野田 純生)は、災害情報や災害で避難中の人のうち、主に

在留外国人や知的障害者への情報伝達に役立つとされる「やさしい日本語」での情報発信を支援するウェブサービスの提供を開始します(<https://tsutaeru.cloud/>)。利用料金は無料。また、試験的に災害情報のクリッピング情報をやさしい日本語で提供する Twitter アカウントの運用を開始しました(https://twitter.com/tsutaeru_web)。

利用イメージ(1)

本システムは、Web ページ単位での翻訳にも一部対応しており、アルファサード株式会社のウェブサイト(<https://alfasado.net/>)で、ページ翻訳のデモをご覧いただけます。

■やさしい日本語について

「やさしい日本語」とは、日本語を学ぶ外国人に対して、語彙を制限して分かりやすく表現する技術のことで、もともとは災害時に外国人に避難を促すために考案されたものです。難しい言葉を避けたり、漢字にふりがなをつけたりすることで、日本語初学者に対しても、よりわかりやすく情報を伝達することができるとされています。



■簡単な手順で、平易な日本語へ変換し、絵文字やふりがなを自動的に追加
このシステムは、日本語を短く分割して、文末表現を統一するなどの処理を行った後、災害情報や最近の時事ニュースなどで使われている日本語フレーズ約 2 万 5 千語(2018 年 7 月現在)を機械学習させ、より簡単な日本語に機械翻訳を行ないます。

システムは日々改良され、今後も登録フレーズ数は継続して増やされます。

※ なお、アルファサードではテキスト変換の正確性についていかなる保証もいたしませんことをご了承の上、ご利用をお願いします。

■システムの利用方法

- <https://tsutaeru.cloud/> へアクセスします。
- テキスト変換入力ボックスに、変換するテキストを入力します(ひとつの文章はできるだけ短くしてください)。
- ページがある場合は情報ソース URL を入力します。
- 「変換」ボタンをクリックします。
- 1 文あたりひとつのツイートボタンが表示されます。
- ボタンをクリックし、必要に応じて内容を修正して、Twitter に投稿してください。

■サービスのホームページアドレス

<https://tsutaeru.cloud/>

【アルファサード株式会社について】

会社名 : アルファサード株式会社

代表者 : 代表取締役 野田 純生

本社 : 大阪府大阪市中央区北浜 1 丁目 1-21 第二中井ビル 4F

東京オフィス: 東京都千代田区九段南 2 丁目 4-4 三和九段ビル 4F

設立 : 2003 年 11 月

主な事業 : ウェブサイト企画・制作・構築、

PowerCMS の開発・販売・サポート

PowerCMS を利用したサイト構築サービス

モバイルアプリケーションの企画制作サービス

ウェブアクセシビリティ向上支援サービス

URL : <https://alfasado.net/>

※ Twitter の名称およびそのロゴ、Twitter の「T」ロゴ、Tweet、Twitter の青い鳥は、米国およびその他の国における Twitter, Inc. の商標です。



高齢者の災害関連死、防ぐために 学会提唱の九つの心得 朝日新聞 2018 年 7 月 11 日

西日本豪雨で避難所生活が長引くにつれ、懸念されるのが、高齢者ら災害に弱いとされる人たちの「災害関連死」だ。復興庁によると、東日本大震災の関連死は約 3 7 0 0 人にのぼり、9 割近くが 6 6 歳以上。どう防げばいいのか。

神戸協同病院の上田耕蔵院長は、災害関連死が起きる仕組みを次のように説明する。

災害による精神的ショックと過酷な避難生活は、交感神経を緊張させる。血圧も上がり、脱水症状も相まって血液粘度が上昇。脳卒中や心筋梗塞(こうそく)を起こしやすくなる。避難生活であまり動かずにいると、ふくらはぎなどの血管内にできた血の塊が肺の血管に詰まって起きるエコノミークラス症候群になる恐れがある。

東京都健康長寿医療センターの桑島巖医師が、暑くなるこれからの時期に重視するのが水分摂取だ。「高齢者のはのどが渴いているという自覚症状が薄れがち。高齢者や病気のある

人に優先的に飲み物を渡してほしい」と話す。

ふだん使っている薬を服用しないことも、体調悪化を招く。自宅から薬が持ち出せなかった場合などは、避難所運営スタッフや巡回する医師に相談するといひ。

血栓予防には体を動かすことも大切という。「特に下半身の運動を」と桑島さん。30分おきに屈伸を10回することが望ましいが、難しければふくらはぎをもむだけでもいいと話す。

日本循環器学会は10日、災害関連死を予防するための「心得」をHP (<http://www.j-circ.or.jp/>) に掲載した。

それによると、①アイマスクや耳栓の使用などによる睡眠の改善②1日20分以上の歩行③水分の十分な摂取による血栓予防④減塩や野菜、果物、海藻類の摂取⑤体重の増減を2キロ以内に⑥マスク着用や手洗いによる感染症予防⑦内服薬の継続⑧血圧の管理⑨禁煙——の9点。日本心臓病学会、日本高血圧学会とともに2015年につくった指針から抜粋したものだ。

上田さんは「自分からは不調を訴えない高齢者もいる。避難者同士で声をかけあい、体調が悪い人を自治体などにつないで欲しい。自治体にも見つける努力が必要で、福祉施設や病院などに移ってもらう必要がある」と話している。(田中陽子、長富由希子)

西日本豪雨 三田市、避難所の資材見直しへ 横たわれる段ボールなど / 兵庫

毎日新聞 2018年7月11日

西日本豪雨で三田市として初めての避難指示を出した森哲男市長は10日、学校などの市指定避難所で体を横たえやすいよう段ボールを備品に加えるなど、避難所の準備資材を見直す意向を明らかにした。

今回の豪雨で市は14世帯37人に初めて避難指示を出した。避難勧告は3435世帯7996人。「避難準備・高齢者等避難開始」も出した。

避難準備・高齢者等避難開始は2016年8月の台風で岩手県岩泉町のグループホームで9人が亡くなったことを受け、従来の避難準備情報から呼称変更。障害や高齢で避難に時間がかかる人たちに避難開始を呼び掛けるものだ。しかし、市指定避難所(34カ所)と開設した1福祉避難所への避難者は60世帯135人(8日午前0時44分のピーク時)にとどまった。これらではない地域の公民館など7カ所に31人が避難し、指定避難所から移ってきた人もいた。

体育館の床の固さを気にした高齢者がおり、公民館には和室など横たわりやすい設備もあるため、市は高齢者を念頭に置いた避難所の備えが必要と判断した。【栗飯原浩】

障害者情報を不適切収集か 宮城県タクシー協が改善へ 朝日新聞 2018年7月11日

宮城県内のタクシー乗務員が障害者を乗せる際に、障害者手帳などに記載された個人番号などを記録するケースがあることが分かった。県タクシー協会(仙台市若林区)は、個人情報への不適切な収集に当たる恐れがあるとして、記録をやめるよう加盟全183事業者に周知する方針を決めた。

障害者は身体障害者手帳や療育手帳を提示すれば、タクシーの乗車料金が1割引きされる。協会によると、事業者の一部は「本人確認のため」などとして乗務員に手帳内容を記録させていたという。

手帳には心身の状態など高度な個人情報が書かれている。今月、仙台市内の障害者から「不要な個人情報収集され、流出が心配」などとする訴えが、協会や東北運輸局に寄せられた。

運輸局によると2008年、全国で個人情報の取り扱いに関する同様の苦情があったとして、手帳の顔写真の確認にとどめるように求める通知を協会や事業者に出した。

だが、協会によると通知を守らずに記録を取る事業者が後を絶たないという。庄子政美専務理事は「不愉快に感じる人もおり、一律に記録しないように改善する」とした。

国交省によると07年9月、関東管区行政評価局のあっせんを受けた関東運輸局が「個人情報の適正な取り扱いの確保の観点から、手帳番号や氏名などを記録しないこと」との通達を出した。国交省の担当者は「同意を得ずに必要な範囲を越えて個人情報を取り扱うことは、法令の趣旨に反する」としている。(井上充昌)

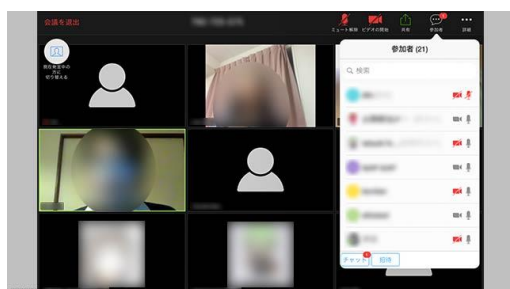
それでも、誰かと…

何年もひきこもっている。
部屋の外に出るのは勇気がいる。
でも「誰かとつながりたい」という思いはある。
そうした人たちが集まる「オンライン当事者会」があると聞き、見学させてもらった。ひきこもった人たちを結びつける、ネットの力とは。(ネットワーク報道部記者 高橋大地)

“ひきこもりながら” つながる

「こんばんはー。ヒキ歴（ひきこもり歴）トータル10年の〇〇です」

「仕事に出てはいますが、人との交流がありません。精神的ひきこもりという感じです」
午後6時半すぎ。ネット上で開催される「オンライン当事者会」の会場に人が集まり始めました。



オンライン当事者会は、家から外に出るのが難しいひきこもりの人でも、気軽に多くの人につながってもらおうと、ことし2月から東京のIT企業が始めました。ひきこもりの当事者や経験者であれば、誰でも無料で参加が可能。メールアドレスを登録すれば、ブラウザやアプリでアクセスできるURLが送られてきます。

10回目となるこの日は、北海道や東京、福島、

岡山など全国から20名が参加しました。

自己紹介のあと、決められたテーマに沿って会話を進めます。

この日のテーマは「夏バテ」でした。

「今の季節、気が付くと体力が落ちているとかありそうですね、どんな対策をとっていますか」と司会者がふると…

「食欲がすぐに落ちるので、梅ジュースを作って飲んでます」「首筋に保冷剤をあてながら過ごしてます」

次から次へと声が寄せられます。

中には、経験者ならではの発言も。

「ずっとひきこもっていると、夏や冬などの季節感がわからなくなります」

無理なく参加

オンライン当事者会への参加のしかたは、それぞれのひきこもりの度合いに応じてさまざまです。ウェブカメラを使って顔を出して発言する人。音声だけで顔は出さない人。チャットのみ、つまりテキストでメッセージを送るだけの人もいます。チャットのみの場合にはコメントがアップされた

NHK ニュース 2018年7月11日



ところで、司会が1件1件読み上げます。一切発言せず、聞いたり見たりしているだけでもOKです。

一方で、決まりごともあります。ほかの参加者への批判はしないというルールです。このため、ギスギスした雰囲気にならず、終始和やかな雰囲気で会は進みます。コミュニケーションが苦手だったり、最初から話すことに不安があるといった人でも、それぞれの状況に合わせて参加することができるのです。

会を主催するIT企業の佐藤啓さんは「実際に人が集まるリアルな会ではちょっと疲れてしまうな、と言う人にも来てもらえれば。そうした人たちがオンラインでのつながりをきっかけに、リアルな当事者会に参加するようになってもいいと思います」と話しています。

適度な“距離感”と“一体感”

参加者の声を聞いたり、次々に書き込まれるコメントの流れを見たりして感じたのが、なんとなくラジオの放送に似ているのではないかということです。

寄せられた声を、司会者が話を膨らませて、展開。話が進む間に届いたメッセージを読み上げて、さらに話題を広げる。みんなが思い思いに語りながら、1つの番組を作り上げていくようにも感じます。

参加者の一人は「会話が苦手な人でもチャットで文面を吟味しながら発信できる。そうすることで適度な距離感を保ちながら良好な関係を築いていけるのがとても心地よい」と話していました。

コミュニケーションに悩みを抱えることの多いひきこもりの人たちにとって、“適度な距離感”を保ちながら“一体感”も得られる、他にはない「居場所」になっているのです。



つながる場所がない 地方のひきこもり

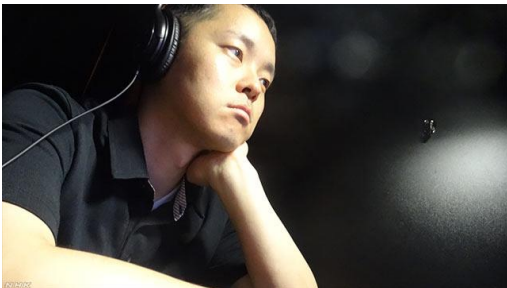
オンライン当事者会には、地方に住むひきこもりの人たちも多く参加していました。

参加者の1人で、青森県でみずからもひきこもりの当事者会を主催しているという下山洋雄さんは「地方ではひきこもりに対するイメージが悪く、外に出るのには高い壁がある」と話します。

近年、東京など都市部では、ひきこもりの人たちが実際に顔を合わせて集まる形の当事者の会が

数多く開催されるようになりました。しかし、地方ではまだまだ少なく、ひきこもりになっても、どのように情報を得ていいのか、どうやってつながったらいいのかわからない人も多いといいます。

「このサイトでは、全国のいろいろな場所に仲間がいて、つながっているという安心感が得られます。私自身も、全国の人と話すことで心が温かくなりました」



“大丈夫な場所”だった

ある意味、“ひきこもったまま”あらゆる人とつながることができるネットの力。この日、オンライン当事者会に参加していたもうひとり、東京都の石井英資さん（35）に話を聞くと、この当事者会とは別に「ネットでのつながり」に救われた経験を話してくれました。

『自分は人間なんだ』と再確認できたんです。ああ、ここは『大丈夫な場所だ』と思えたんです

よね」

石井さんにとって「大丈夫な場所」だったのは、ネットのゲーム動画の配信サイトでした。配信されているのは対戦型の格闘ゲームの大会です。腕自慢のプレイヤーたちが、お気に入りのキャラクターで真剣勝負をします。プレイ画面の右側にはコメント欄があり、ネットで観戦する人たちがリアルタイムでコメントを寄せ、お互いにやり取りすることができ

ます。

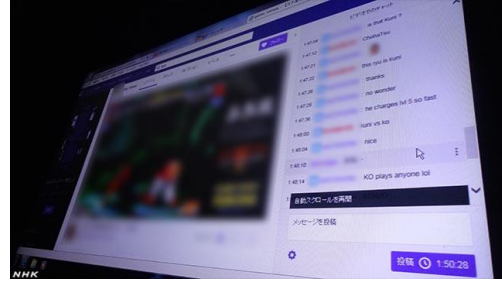
プレイヤーどうしの派手な必殺技の応酬。形勢を一気に逆転させる連続技。プレイの1つ1つにコメント欄は大きな盛り上がりを見せます。自分もコメントをすることで、さまざまな人と実際につながっていると感ずることができると言います。

社会からの孤立の末

石井さんは、1人暮らしの大学院生だった11年前、数週間、大学を休んだことをきっかけにひきこもっていきました。

「1か月も休むと研究で後れを取り、行きにくくなってしまっ。そのまま、どつぼにはまっ。ずると、という感じだ」

その後、中退や再入学を繰り返し、結局、大学をやめました。当時行っていた塾講師のバイトでも、「自分の経歴に触れられないようにした

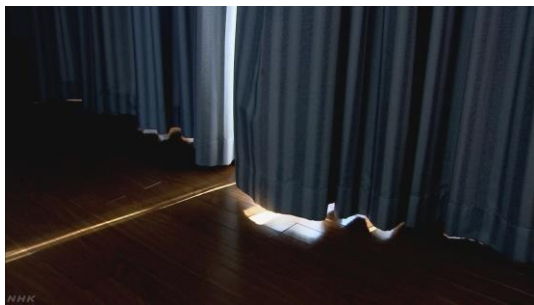


い」などと身構え、同僚ともコミュニケーションがうまくとれず、大きなストレスになっていきました。

夜遅く塾から帰宅したあとは、朝方までひたすらゲームをする。日中は寝ようとしてもすぐに目が覚めて、まともに寝られない。

「まるで廃人のようで、生きている感じがしなかった」

「自分はだめな人間だ」という思いとらわれ、



精神的に追い込まれていきました。

感謝されてうれしかった

他人とのコミュニケーションの取り方が分からなくなっていた石井さんを救ったのが、ゲーム観戦サイトでのオンラインでの会話でした。同じ興味を持つ人とだけコミュニケーションが取れること。そして、自分が「ひきこもり」だということを知られるおそれがないことも気楽でした。

「サイトに訪れて、『こんにちは』と書き込めば、『こんにちは』と返してもらえる。ほかにも、海外の人がサイトを訪れたときに、実況をしている人の解説を英語に訳して伝えたり、逆に海外の人の英語コメントを訳して伝えたりすると感謝されるのがうれしかった」こうしたコメント欄でのやり取りの一つ一つの積み重ねが、「自分、コミュニケーションできているじゃん、結構役に立っているじゃん」という自己肯定感につながっていったと言います。

「コメントを打つと、すぐに返してくれるのがうれしかった。やはりどこかで人とつながっていたいという気持ちは常にありました」



石井さんは、その後、実際の当事者会にも足を運ぶようになりました。

ネットの先では誰かが待っている

オンライン当事者会、はじめに聞いた時は、ひきこもっている人たちが、それぞれの悩みについて深刻な話を吐露しあう、そんな会を勝手に想像していました。しかし、いい意味でそうした予想は裏切られました。参加者の人たちは、たあいのない、ごくごく普通の、和やかな会話をしていました。

そして、むしろ、そうした会話やコミュニケーションこそが大切なのだと気付かされました。

「家から出ずに、ひきこもってネットばかりしている」

「ネットはひきこもりを悪化させる」

これまでインターネットはどちらかと言えば、そんな文脈で語られることも多かったように思います。もちろん、対面のコミュニケーションは大切ですし、外に出なければ経験できないことはたくさんあります。でも、そこに踏み出すのが難しいという人が、数多くいます。

「一人でいるほうが気が楽だけど、どこかで人とのつながりを求めている」

インターネットは、そんな人たちを互いに結びつけ、新しい人間関係へとつながる扉にもなっています。

社説：災害情報の伝達 受け手の立場で検証を 京都新聞 2018年07月11日

150人を超す犠牲者を出した西日本豪雨。まだ安否の分からない人が多くいる。捜索に全力を挙げてほしい。

避難住民への支援、生活の復旧を急ぐ必要がある。現地の行政機関だけでは対応し切れないだろう。全国各地から派遣された自治体職員、経験を積んだNPOの力が不可欠だ。救援物資を円滑に届け、被災住民を力づけたい。

ところで、なぜ平成最悪の犠牲者を出してしまったのか。気象庁は「数十年に1度」の大雨特別警報を発し、各自治体は早めの避難勧告・指示を出していた。しかし、全体として避難に結びつくことは少なかったようだ。

送り手の危機感が受け手に十分伝わったのか。情報を受ける側に立った検証が必要だ。

情報は頻繁に出された。しかし、あまりの数の多さが受け手をうんざりさせ、肝心な情報を埋没させなかったか。情報量の整理、発信のタイミング、分かりやすい表現など、検討すべき課題は多い。

専門家からは、気象庁の記者会見が「見慣れた光景」となり危機感を持ちにくいとの指摘がある。大したことはない、との「正常性バイアス」の心理も働くという。

受け手は自分ごととしてとらえないといけませんが、現実には人ごとでやり過ごしてしまう。こうした心理を踏まえて、情報発信の方法を考える必要があるだろう。

昨年、京都大宇治キャンパスで開かれた日本災害情報学会で、災害情報の共有のために地域ネットワークの構築が重要と指摘された。NHK静岡放送局は地元の聞き取りを進め、地域で親しまれる地名で伝える災害実況の実験を報告した。発信側と地域をつなげる試みであり、もっと広めたい。

情報発信が可能なインターネットの活用も検討すべきだ。被災者からツイッターで「#救助」が発信され、ごく一部だが、実際に救助に結びついている。米国では活用が進んでおり、課題を踏まえた上でルールなどを議論してはどうか。

地域の自主防災組織が、顔の見える関係で情報を伝え、警戒を呼びかける。とくに高齢者には有効だろう。

昨年施行の改正水防法で、避難などの行動計画作りが進んでいるが、地域主体で情報収集を組み込んでおきたい。行政や専門家の協力で身近な危険箇所を調べ、防災の勉強をしておけば、伝えられる情報の意味を理解し、行動に移すことができる。

情報を受けるにも備えが要る。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行